

からくり儀右衛門こと、田中久重は、江戸時代も終りに近い18世紀末、久留米城下の通町十丁目に生まれました。幼い頃から発明に夢中となり、五穀神社のお祭りで上演したからくり人形の屋台が評判を呼びました。

からくり師として関西地方でのロングラン公演が大成功をおさめると、大坂・京都で様々な機械の発明と製造販売を手掛けます。この間、無尽灯や和時計の最高傑作といわれる万年時計を製作しました。

50歳を過ぎて西洋の科学技術を学び、佐賀藩と久留米藩に招かれます。そこでは、蒸気車や蒸気船模型、ボイラー、洋式大砲、小銃などの製造に大活躍したのです。

明治維新後は、文明開化の東京に進出、83歳で亡くなるまで、電信機や電気機械の製作に取り組みました。彼の工場はのちに東芝をはじめとする現代企業の源流となりました。



▶晩年の久重（『田中近江大掾』より）

田中久重の生涯

和暦	西暦	年齢 <small>（歳）</small>	できごと
久留米時代	寛政 11年 (1799)	1歳	久留米城下の通町十丁目に生まれる
	文化 4年 (1807)	9歳	開かずの硯箱を製作
	文政 2年 (1819)	21歳	五穀神社などでからくり披露
	文政 7年 (1824)	26歳	大坂などでからくり興行
大坂・京都時代	天保 5年 (1834)	36歳	大坂移住、懐中燭台発明
	天保 8年 (1837)	39歳	京都移住、無尽灯発明
	嘉永 2年 (1849)	51歳	「近江大掾」の称号を得る
	嘉永 3年 (1850)	52歳	須弥山儀を製作
嘉永 4年 (1851)	53歳	万年時計が完成する	
佐賀・久留米時代	嘉永 6年 (1853)	55歳	佐賀藩の理化学研究所（精錬方）へ
	安政 2年 (1855)	57歳	蒸気車・蒸気船の雛形製作
	文久 2年 (1862)	64歳	佐賀藩電流丸の蒸気ボイラー完成
	元治 元年 (1864)	66歳	久留米移住、久留米・佐賀兼務
	慶応 元年 (1865)	67歳	国産初の蒸気船凌風丸完成（佐賀）
	慶応 2年 (1866)	68歳	久留米で大砲鑄造、上海に密航
東京時代	明治 6年 (1873)	75歳	東京に転居
	明治 7年 (1874)	76歳	電信機の製造を開始
	明治 8年 (1875)	77歳	東京・銀座に店舗兼工場を構える
	明治 11年 (1878)	80歳	電話機を試作、報時器を製作
	明治 14年 (1881)	83歳	東京の自邸にて永眠

からくり儀右衛門の誕生

生活を明るく便利に

西洋科学技術への挑戦

電気機械工業の礎

I. 生誕地（通町十丁目）

久重は、江戸時代終わりの寛政11年（1799）、久留米城下の通町十丁目で生まれました。家業は「田中屋」というべっ甲細工師で、幼名を岩次郎といました。通町は、城下町を東西方向に延びる当時のメインストリートで、通り沿いに「うなぎの寝床」状の町屋が並んでいました。

べっ甲細工は、武士階級や裕福な商家の女性たちにしか買えない高価なもので、父は腕のいい職人として数人の弟子を抱えていました。発明工作に夢中となった久重に代わり、家業は弟の弥市が継ぐこととなります。

なお、生家は、大正13年（1924）に開通した私鉄九州鉄道（現西鉄天神大牟田線）の工事にともない取り壊され、現在は石碑が建っています。

II. 五穀神社（通外町）

生家にほど近い通外町の東に隣接して、五穀神社があります。城下町の東の入り口にあたるこの神社では、春と秋に盛大な祭礼が行なわれていました。祭礼には、たくさんの屋台や見世物小屋が並び、近隣から集った多くの人々を楽しませました。見世物小屋の中でも特に人気を集めたのは、八つに分かれた城下の町掛りがそのできばえを競い合う「からくり人形」の舞台でした。

久重も工夫を凝らし、様々なからくり人形の仕掛けを上演しています。特に得意だったのは、水の圧力や落下を利用する「水からくり」です。ひとりで人形が踊り、笛を吹いたりする仕掛けに人々は驚嘆し、惜しみない喝采を送りました。